

Stories Behind Building Community for Youth Empowerment

高校・大学・NPOの連携による多文化な若者たちの居場所づくり
都立定時制高校・多言語交流部の取り組みから



Stories Behind Building Community for Youth Empowerment

高校・大学・NPO の連携による多文化な若者たちの居場所づくり
都立定時制高校・多言語交流部の取り組みから

Between's Passport Initiative

目次

第1部：はじめに	3
1. 『移民』の若者のエンパワメント	6
2. 『移民』の若者を取り巻く現状	8
3. 多言語交流部 (One World) を立ち上げた背景	10
第2部：三者連携によるコミュニティづくり	13
1. 大学の役割・実施したこと	15
2. NPO の役割・実施したこと	17
第3部：活動事例	19
1. 第1期：立ち上げ	21
2. 第2期：試行期間	24
3. 第3期：プログラム化・仕組み化	26
第4部：終わりにかえて	35

第 1 部：
はじめに

はじめに

Between's Passport Initiative は、東京に住む若者たちの多様性を育てる人材育成事業です。「東京アートポイント計画」* の一つである本事業は、『移民』** の若者を異なる文化をつなぐ社会的資源と捉え、アートプロジェクトを通じた若者たちのエンパワメントを目的にしています。

2016 年から始まったこの事業は、まず『移民』の若者が集うコミュニティをつくることからはじまりました。コミュニティには、土地に根ざした地域コミュニティのような形もあれば、学校や職場といった学びの場や働く場という形もある中、Between's Passport Initiative では、『移民』の若者が多く在籍する都立定時制高校という学びの場に焦点をあて、放課後部活動「多言語交流部 (One World)」を通じたコミュニティづくりを行なってきました。

多言語交流部 (One World) は、東京都立一橋高等学校・定時制の部活動として、顧問である角田仁先生を中心に 2015 年に立ち上がりました。定時制高校の生徒の居場所づくりを目的としてはじまったこの活動は、高校・大学・NPO の三者連携という形を取りながら、留学生やアーティストとの交流プログラムを通じて、居場所づくりを進めてきました。およそ 3 年間にわたり続けてきたこの部活動は、『移民』の生徒や日本人生徒など多様な背景を持つ生徒が集い、多言語・多文化を学びながら共に学校生活を営む場となっています。

本書は、多言語交流部 (One World) における、高校・大学・NPO の三者連携による定時制高校でのコミュニティづくりを紹介した事例集です。

学校現場などで『移民』の若者達と接しながらも、どのような取り組みを進めればいいのか試行錯誤している学校教員や、大学の地域連携などを模索する職員、現場をもつ NPO 実務者をはじめ、これからプロジェクトをつくりたいと思っているアート関係者まで、この事例集は、幅広い分野の方へのヒントとなることを願って執筆されました。

高校・大学・NPO の三者がどのように連携し、部活動という居場所をつくり、若者たちのエンパワメントを進めたのか。三者連携のモデル・実施スケジュール・プログラム案・アクティビティなどの具体的な事例をはじめ、居場所づくりの必要性から定時制高校をはじめとする『移民』の若者達を取り巻く環境についても紹介しています。

本書で取り上げている事業の事例をきっかけに、『移民』の若者をはじめ、様々な背景をもつ若者の多様性を育てるコミュニティづくりが、全国の高校などの実践の場に広がっていくことを願っています。

* 地域・市民が参画するアートプロジェクトを通じて、東京の多様な魅力を創造・発信することを目指し、東京都とアーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）が展開している事業です。まちなかにある様々な地域資源を結ぶアートプロジェクトを、アーティストと市民が協働して実施・展開することで、継続的な活動を可能にするプラットフォームを形成し、地域社会の担い手となる NPO を育成します。

<https://www.artscouncil-tokyo.jp/>

** 本事業では、多様な国籍・文化を内包し生活する外国から来た人々を、『移民』と呼んでいます。

1. 『移民』の若者のエンパワメント

徳永 智子（群馬県立女子大学 講師）

世界の移民の約 8 人に 1 人は、15 歳から 24 歳の若者と言われています（GMG、2014）。幼少時に親に連れられて移住した若者もいれば、より良い教育や職業機会を夢見て移住する若者もいるでしょう。「子供」でもなく、「大人」でもない若者たちは、複数の国に拠点をもちながら、キャリア選択から人生設計まで、大きな選択に迫られています。この時期は、特に移民の若者にとって、学力や言語、在留資格や経済的な状況などで、様々な困難に直面する時期でもあります。日本国内では高校を中退したり、不安定なアルバイト生活を送る移民の若者が多いという現状があります。どのようにしたら、移民の若者たちが困難を乗り越え、社会で活躍できるようになるのでしょうか。若者の芽をつぶさず、活躍できる未来をつくるにはどうすればよいのでしょうか。社会には一体どのような壁があるのでしょうか。

まずは、移民の若者を捉える視点の転換が必要だと思います。彼ら、彼女らについて語る時、しばしば「日本語能力が低い」「学力が低い」「問題行動が多い」など、ネガティブな言葉が使われます。言語も文化も異なる国で、新しい言語を学ぶこと、その言語で教科を学ぶことの難しさは想像をはるかに超えるでしょう。日本生まれ・日本育ちの子供にとっても理解しにくい学校のルールを学ぶことは容易ではありません。しかし、移民の若者という個人を問題として見るのではなく、エンパワメントというアプローチから彼らの持つ可能性に着目することで、移民の若者の強みが見えてきます。

移民の若者の多くは、複数の言語を話し、言語や文化の橋渡しをする能力を持っています。欧米では、「文化の仲介者」(cultural mediator)と呼ばれます。両親と話すとき、友達と話すとき、街の中で話すときなど、時と場合によって、言語を使い分けること。フィリピンルーツの子供が、タガログ語と英語を混ぜて話すタグリッシュ (Taglish) は一つの例ですが、複数の言語を混ぜ合わせて、独自のハイブリッドな言葉をつくり出すこと。また、「文化のカメレオン」(ポロック・ヴァン・リーケン、2010)としての能力も高く評価されています。母国と移住先の国、家庭と学校・職場など、様々な移動を繰り返すなかで、高い適応能力を身に着けた移民の若者は、異文化のなかで瞬時に行動や態度、言語や服装、表情や雰囲気を変え、新しい場に馴染むことができます。これは、重要性が指摘される「グローバルな視点」であり、さらに、母国とのつながりが強いネパールやフィリピンルーツの若者が、得意の英語力を生かして、海外の大学に進学したり、ビジネスを始めたりすることもあります。

このような能力の一つ一つを発見し、評価していくこと。そしてその力や資質をさらに伸ばせるような支援のあり方を考えていくこと。「出来ないこと」を問題として取り除くのではなく、「出来ること」という強さに基づいたサポートをしていく必要があるのではないのでしょうか。私たちは、このような考え方に基づき、定時制高校で多文化の若者たちが集う部活づくりを進めてきました。一般的に行われている教科支援や日本語支援ではなく、移民の若者の強みでもある多言語・多文化に焦点をあて、多様な人々との交流を通じた居場所づくりを目指してきました。

2. 『移民』の若者を取り巻く現状

海老原 周子（一般社団法人 kuriya 代表理事）

日本全国の外国人登録者数は、約 250 万人と増加傾向にあり、東京都の外国人登録者数は 537,502 人（2017 年 12 月末現在、法務省）とされています。

2018 年 1 月、「東京 23 区の新成人 8 人に 1 人が外国人」という報道があったように、私たちの日常はこれまで以上に多様な価値観、文化を背景としている人と接する機会が増えています。そして、定時制高校を始めとする教育の現場でも、外国籍もしくは両親のどちらかが外国籍の児童や生徒の数は増加傾向にあるとされています。

東京都教育委員会によれば、都立高校における「外国籍」の生徒は、1,364 人（全日制 847 人、定時制・通信制 517 人）とされています（2016 年 5 月現在）。2007 年の調査より、その数は 69% 増加しています（公立学校統計調査報告書【学校調査編】より）。さらに隔年で文部科学省が実施している、「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受け入れ状況等に関する調査」（2016 年度）によると、東京都の高校に通う日本語指導が必要な外国籍の生徒は 526 人、日本国籍の生徒は 80 人となっています。

外国籍もしくは両親のどちらかが外国籍の生徒のみの実態を把握する統計はなく、正確な数字を把握することは困難ですが、公立高校に通う外国籍生徒の約 38% が定時制高校に在籍しており、都立定時制高校に集中していることが見受けられます。

定時制高校の中退率は高く、3人に1人の進路が卒業後未決定とも言われている中、外国につながる高校生も、学校での孤立や経済的な困難など、様々な理由から高校を中退してしまいがちな状況があるのではないかとされています。このように高校生が『孤立』しがちな現状に焦点をあて、学校内での孤立を防ぎ、中退を予防する上でも居場所というコミュニティの重要性に着目しました。

3. 多言語交流部 (One World) を立ち上げた背景

角田 仁（東京都立一橋高校 定時制 教員）

部活動の立ち上げ

本校には、外国につながる生徒が多く在籍しています。外国につながる生徒の支援と多文化共生を進めることを目的に、部活動の取り組みを始めました。具体的な活動としては、居場所づくり、交流、支え合い、支援、進路保障などに取り組んできました。2015年に言語研究部として活動をスタートさせ、4名の顧問がつき、生徒の希望で普段は「One World(ワン・ワールド)」と愛称で呼ぶこととしました。その後、2017年4月からは、言語研究部を多言語交流部 (One World) に改名しました。2015年5月の立ち上げ時には、顧問がホームルームや授業の生徒たちに声をかけ参加を募りました。その結果、1年生12名（中国5名、フィリピン4名、日本3名）4年生4名（フィリピン3名、ミャンマー1名）が部員として集まりました。

部活動の課題

本校は、昼夜間Ⅲ部制定時制高校です。そのため生徒の在校時間が変則的となっています。効率化を求めた定時制大規模校としての特徴である一方で、部活動を運営する際には、顧問が生徒と一緒に活動ができないなど、時間的制約につながるといった運営上の課題もあります。具体的には、部活動の活動時間が教員の会議の時間と重なる、活動時間が短くなってしまふ、学校の時間割が変則であるため午前のⅠ部の生徒は夕方まで4時間以上残らないと部活動に参加できない、夜のⅢ部の生徒は授業の前に参加せざるをえないためアルバイトと両立できないなどの課題があります。

連携による課題解決

こうした問題がある中、大学と NPO との連携による課題解決に取り組みました。私は本校だけではなく、在任した各校においてこうした取り組みを進めてきました。東京都立大森高校定時制では、1997 年から、東京都立小山台高校定時制では 2007 年から取り組んでいます。そして東京都立一橋高校定時制では、多文化環境に置かれた若者の人材育成を行う NPO 団体と大学の教員に相談したところ、協力が得られることになりました。それが一般社団法人 kuriya の代表・海老原周子氏と慶応義塾大学国際センター特任講師・徳永智子氏（当時）でした。文化祭の準備・見学から始まり、kuriya のスタッフと慶応義塾大学の留学生が定期的に多言語交流部 (One World) の支援・交流に参加していただき、アドバイスをもらうことができました。こうした関わりがきっかけとなって、多言語交流部 (One World) を始めとする三者が協働で部活動を企画し、実施していくことになりました。

生徒への声かけ、リーダーの育成

外部団体との協働を通して、活動はだんだん安定してきました。そんな中、部活動のリーダーとして高校生が成長し、自主的な活動の実現（顧問主導から生徒主導へ）をたえず意識化するようになっていきました。これは、学校外連携により、高い効果が表れているということだと思います。留学生やアーティストなど外部との接触を通じて自らの役割を考えながら活動を進める中で、主体的に活動が行われるようになり、外国につながる生徒の実態把握を部活動で取り組むといった活動を行うまでになりました。

学校外との連携の重要性

今回の取り組みを通して、外国につながる生徒の支援・多文化共生教育の

取り組みを充実させるためには、さまざまなノウハウやスキル、豊富な人材やネットワークを持つ学校外の支援者や協力者といかに連携を取ることができかがポイントだと感じています。学校以外の人材を受け入れることで、多様な能力やアイデアを活動に反映することができたと感じています。このように今回はさらに連携を強化する中で、良い結果が生まれてきたように思います。

第 2 部 :

三者連携によるコミュニティづくり

三者連携によるコミュニティづくり

居場所 / コミュニティの目的

多言語交流部 (One World) というコミュニティづくりにあたり、高校・大学・NPO の三者間で、部活動の目的を明らかにした結果、下記の3点があげられました。

- ①友達や先生など様々な大人とつながれる場
- ②高校生も共に活動づくりに参加することを通じてライフスキルを磨く場
- ③日本人の生徒も参加でき、多様な文化や言葉を体験できる学び合いの場

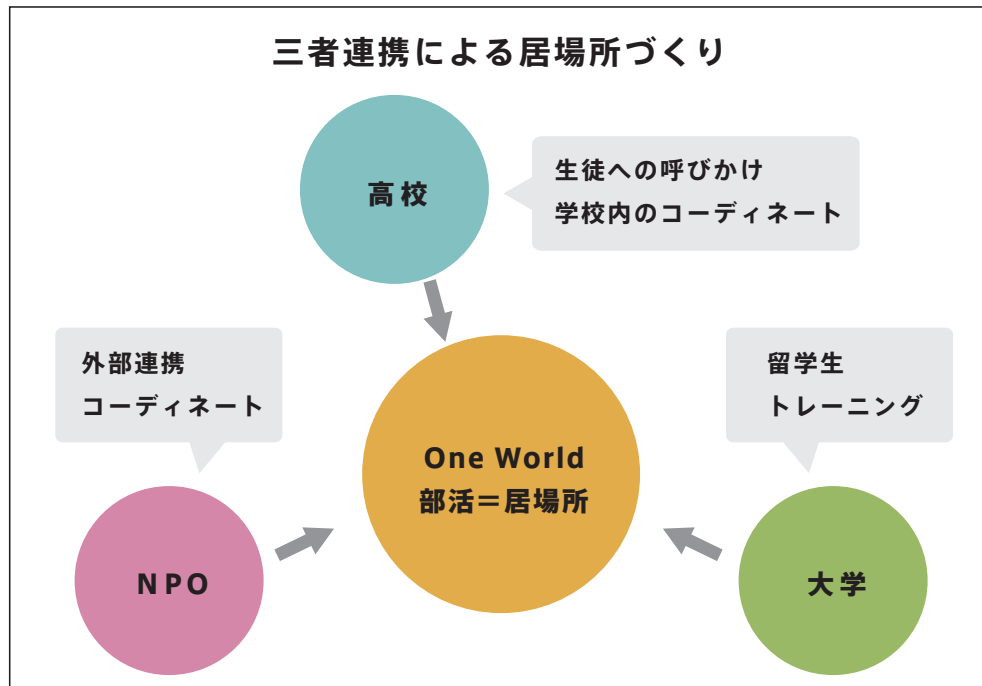
三者の強みを活かした役割分担

コミュニティづくりを進めるにあたって、高校・大学・NPO の持つ、それぞれの強みを活かして、役割分担をしました。

高校：学内のコーディネート、生徒たちへの呼びかけ

大学：留学生等を投入したプログラム作り、実態調査
サービス・ラーニングを活用した仕組みづくり

NPO：大学・高校とのコーディネート、プログラムづくりと実施、
高校生・留学生の育成



1. 大学の役割・実施したこと プログラムづくり・仕組みづくり

徳永 智子

サービス・ラーニングの授業の立ち上げ

2016年度後期から勤務校の国際センターでサービス・ラーニングの授業（「越境する子どもと若者」（授業言語＝英語））（実践編：シラバス参照）を開講し、大学生が授業の一環で高校の部活動に関わることができる仕組みづくりを行いました。これまで大学生はボランティアとして関わっていたのですが、授業の開講とともに、学習活動の一部として高校の活動に関わることになりました。

学生たちは、移民の子供・若者をテーマとした授業（週1回 90分 14週間）を受講し、関連する概念や理論を学びつつ、一般社団法人 kuriya のコーディネートのもと多言語交流部 (One World) の活動に学期中に1人3回以上参加しました。高校生との交流を深め、居場所づくりやエンパワメントにかかわることが大きな目的です。授業の前半では、kuriya 代表の海老原周子氏をお呼びし、オリエンテーションを行っていただきました。活動への心構えや注意すべきことをお話ししていただき、高校生との交流で起こりうる場面を想定したケーススタディのディスカッションなどを行いました（実践編：ガイドラインおよびケーススタディを参照）。その後、受講生の中から、水曜日と金曜日のリーダーと副リーダーを決めて、リーダーを中心に活動を行いました。

受講生は、短期の交換留学生と正規学生（主に日本人）であり、2016年度後期は11名、2017年度前期は18名、2017年度後期は24名が参加しました。留学生は、3、4年生が多く、ドイツ、オーストラリア、ニュージーランド、トルコ、オランダ、アメリカ、イタリア、イギリス、スペイン、フランス、タイ、ブルネイ、韓国などの大学に所属しており、移民の背景をもつ学生も多くいました。活動に参加した後は、観察したこと、感じたことなどをフィールドノートにまとめ、大学の授業で合同のふりかえりを行いました。

授業の最終回は、高校生を大学に招待し、学生主導でキャンパスツアーやアートワークショップなどを行い、交流を締めくくりました。

2.NPOの役割・実施したこと 部活動の立ち上げと試行期間の伴走

海老原 周子

コミュニティを共につくる

多様な背景をもつ生徒達が集うコミュニティは、どのようにつくることのできるのでしょうか。私たちは、文化やアートには、日本語支援や学習支援などの「支援する / される」という形ではないあり方で、様々な理由から孤立しがちな人々をつなぎ、異なる背景を持った人々が多様性を活かしながら活動する場づくりに有用であると考えています。例えば、留学生やアーティストとの交流プログラムづくりでは、高校生達も一緒になって考えることで「共につくる」という関係性をつむぐことを進めてきました。

水平な関係性・反転する関係性

留学生と高校生が交流する中で、日本の滞在歴が長い『移民』の高校生が留学生に日本での生活のアドバイスをするなど、「支援者と被支援者」の関係性が「反転」したり、互いに助け合う「水平」な関係性をつくることができると考えています。同時に、高校・大学・NPOの三者間でも連携して事業を実施するにあたり、居場所づくりという共通の目的を軸に、上下関係ではなく水平な関係性をつくってきたことが重要な要因であると考えられます。

多様なアクター間の潤滑油

そのような三者連携の中で、NPOが果たす役割とは、多様なアクターの調整（コーディネート）です。居場所づくりの実践には、高校の生徒・

高校教員・大学教員・大学の留学生・アーティストなど、多様なアクターが関わってきます。例えば、アーティストや留学生との交流のような外部連携においては、教員や生徒たちをはじめ、多様なステークホルダーとの連絡調整を担いながら、それぞれと密なコミュニケーションをとり、潤滑油のような役割を担いながら活動づくりを進めて行きます。

自らの場は自らの手で

高校や大学単体では時間や労力などの物理的な制限から担うことの難しい人材育成も行なっていきました。部活動以外の場で、高校生や留学生がNPOのインターンとして、部活動をより充実した場にするためにはどうすればいいか、自らの場を自らの手で作りあげるにはどうすればいいかを考える機会を提供しました。このような役割は、学校の外にいるNPOだからこそ発揮できる強みであり、高校や大学の「先生」ではない大人としての立場から、生徒や留学生と接することができる人材育成でもあります。

第 3 部： 活動事例

活動事例

三者連携による居場所づくりとしての部活動を展開して行く中、2015年から2017年までには3つの活動フェーズがありました。各フェーズでどのようなことが起こっていたのか、取り組みの事例と共に紹介します。

【第1期：立ち上げ】

活動内容・Digital Storytelling・写真と映像の表現活動

- ・2015年9月-12月：文化祭準備を中心に部活動が立ち上がる。
- ・2016年1月-3月：写真と映像の表現活動を週2回実施。

【第2期：試行期間】

活動内容・留学生との言語交流・異文化交流

- ・2016年4月-9月：留学生の自主活動として、英語学習や多文化交流を週1回実施。

【第3期：プログラム化・仕組み化】

活動内容・留学生やアーティストとの多文化交流

- ・2016年10月-2017年3月：生徒の自主活動・英語学習・多文化交流を週3回実施。
- ・2017年4月-2017年12月：多文化交流プログラムをつくる。(サービス・ラーニング)
- ・2018年1月-2018年3月：学生リーダーの役割を設け、運営の仕組みをつくる。

1. 第1期・立ち上げ期：居場所をつくる 写真と映像の表現活動

Community Building through Storytelling



- 実施期間：2016年1月～3月（毎週月・金 16:30 - 17:30）
- 合計実施日数：19日
- 実施場所：東京都立一橋高校 定時制
- 目的：
 - ・ 定時制の高校生達が映像や写真といった創作活動に触れ、自らが制作する過程での様々な気づきを通じて、『移民』の若者が、ルーツや自らが所属するコミュニティに肯定感を持つきっかけをつくる。
 - ・ 多様なバックグラウンドを持つ学生同士での横のつながりを培う場の作成を促す。
 - ・ ストーリーテリングの手法を用い、写真や映像のメディアを取り入れコミュニケーション能力を培う。

● ゲスト講師：堀江久代

● 実施内容：

2016年1月から2016年3月は、カナダで難民や移民の若者たちにワークショップを行なっている堀江久代氏をゲストに迎え、アクティブ・ラーニングの手法を用いて、生徒たちの表現活動を行いました。

1、2週目 自己紹介、個人とグループでの目標設定、何を使って物語を

伝えるかを話す。

3 週目 物語をつくる

- ・ストーリーテリング（物語を伝える）とは？
- ・誰にでも伝えたい物語はあるということ
- ・カメラを使って宝探しをしてみよう
- ・なぜ今、その物語を語ることを選ぶのか

4、5 週目 物語作成

6 週目 物語作成終了、過程の評価（*学生に対する評価ではなく過程の評価を学生がする）

7 週目 制作過程・テクニックのレッスン

8 週目 文章下書き・映像構成終了

9 週目 映像作成

10 週目 映像作成（吹き込み、スペシャルエフェクト終了）、上映会、最終評価

●工夫・注意点・気づきなど：

家庭環境や経済的に困難である生徒もいるため、ストーリーテリングの際に、話を引き出す時には本人の様子を十分に観察しながら行うなど配慮しました。語ることに辛そうな場合は、無理に語ることを強要せず本人のペースに合わせて行うようにしました。

●成果など：

部活動の立ち上げの準備期間に当たる第1期は、部活動を一つの居場所 / コミュニティとして高校生が捉えられることができるように、カナダで専門家として活動する堀江久代氏を講師に迎え、Digital Storytelling のワークショップをしました。Digital Storytelling とは映像と写真を通じた自己表現活動の一つです。自らの物語を自分で伝えるという行為を通じて、自己肯定感を育みます。参加した生徒は3人と少人数ですが、組織の最小単位である3人が定期的に集まって活動を続けることが今後の

活動につづくコミュニティの核となりました。この準備期間がとても重要な役割を果たしており、このようなコミュニティづくりはボランティアでは難しく、専門性と経験のある講師による実施だったからこそなし得たと言えます。

2. 第2期・試行期：自己肯定感をつくる 言葉と文化の交流活動 Community Building through Language and Culture



●実施期間：2016年4月～9月（毎週水・金 16:30 - 17:30）

●実施場所：東京都立一橋高校 定時制

●目的

- ・多様なバックグラウンドを持つ学生同士での横のつながりを培う場の作成を促す
- ・母語維持・母文化の肯定

●講師：留学生による自主的な活動としてはじまる

●実施内容：

2016年4月から2016年9月は、留学生による英語学習活動から多文化理解活動まで様々なアクティビティを実施しました。英語学習活動では、国際コミュニケーションの能力を身につけることを視野に、自己紹介やフリートークをはじめ、英語を中心に様々なゲームを行いました。例えば、アルファベットを一つ決め、時間制限を設けて多くの単語を出す単語ゲームや、2つのチームで黒板に書いた絵が何かを当てることを競う Pictionary というゲームなどを行いました。多文化理解活動では、英語以外の言語や文化の重要性を認識することを意図し、自らの持つ文化や

言語を紹介するアクティビティを実施しました。

●成果・工夫など：

第2期は、コミュニティでの活動をつくるプログラム策定の試行期間でした。新入生入部による参加人数の増加に伴い、様々な生徒が参加する中で、留学生による英語学習活動から多文化理解活動まで様々なアクティビティを実施する中、留学生が事前に部員に役割を指示し、生徒の主体性を引き出すような活動づくりをしました。例えば、事前に部長と副部長にどのようなことを他の生徒に伝えるかを話すなど、部活内でのリーダー育成につながる活動が第2期では生まれました。

3. 第3期・運営期：プログラムと仕組みをつくる アーティスト・留学生との多文化交流 Community Building through Arts and Cultural Exchange

多様な価値観を学ぶアーティスト・プログラム(1) 言葉のワークショップ



●実施期間：2017年2月8日(水)、10日(金) 16:30 - 17:30

●実施場所：東京都立一橋高校 定時制

●目的：

- ・言葉を切り口に、自らが持つ多様な文化や言葉の重要性に気づく機会をつくる。
- ・自らの名刺をつくれるように、アイデンティティは自分で選ぶことができることを体感する。
- ・複数の名刺を持つように、アイデンティティも複数持つことができるということを知る。

●ゲスト講師：Okui Lala (マレーシア)

●実施内容：

マレーシア・ペナンを拠点に活躍する Okui Lala 氏をゲストに迎え、言葉のワークショップを行いました。まずは英語・中国語・マレー語を使ったアイスブレイキングから始まり、知らない言葉の音や文字から意味を想像する言葉の連想ゲームをしました。その後、自らの名前の由来について

て参加者同士が発表します。そして、自らの名前を綴った名刺をつくり、人種・国・文化・性別・宗教など自らの持つアイデンティティの重要性について話しました。『移民』の高校生のみならず、日本人の高校生も参加し、全体で10名ほどの参加者がいました。

- ・言葉の連想ゲーム アイスブレイキング 10分
- ・自らの名前の由来を話す 20分
- ・自分たちの名前の名刺作成 20分
- ・振り返り 10分

●工夫・注意点・気づきなど：

外国から来日して数年とまだ滞在歴が短い高校生の中には、日本語ができない、文化に馴染めない経験や、外国人であることにより受ける差別から、自らの持っている母文化や母語に対して、自信を失ってしまうことがあります。このような状況に対して、これまで自分が育ってきた文化や言葉は、重要な資産であることを体感できるように、例えば英語や中国語のように大勢の人数が使う言葉ではなくても、自らの持つ言葉や言語は平等に大事であるという点を繰り返して伝えました。

自らの名前の由来を発表する時に、それぞれ意味を持って名前がつけられており、発表した時に嬉しく誇らしげな様子が印象的でした。一方で、親との間に、自分の名前の由来について聞くことのできる良好な関係性をもたない高校生もいる場合もあるので、その点を配慮し、事前に高校教員等、関係者と参加者の背景を確認しておきました。

■アーティスト略歴

Okui Lala

1991年、マレーシア生まれ。同国ペナン島在住。写真やビデオ、インスタレーションを用いて、作品を発表。クアラルンプールにあるマルチメディア大学でメディアアートを専攻の後、さまざまなメディアを用いた作品を

発表。人や地域への取材を通して作品づくりを行う。近年、子ども向けワークショップのファシリテーターとしても活動を開始。これまで、「The Good Malaysian Woman Group Exhibition」でインスタレーション作品《Sewing Sew Eng》(2014年)やペナン島ジョージタウンにて団地を使った「People's Court」プロジェクトで《It takes a decade to grow a tree, a century to shape mankind》(2014年)、ペナン州立美術館にてミャンマー移民について取材した《Let's Drink and Eat Tea!》(2015年)などを発表。

多様な価値観を学ぶアーティスト・プログラム（2） アイデンティティのワークショップ



●実施期間：2017年5月10日（水）16:30 – 17:30

●実施場所：東京都立一橋高校 定時制

●目的：

- ・人種、国、文化、性別、宗教など様々なアイデンティティや多様な価値観について学ぶ。アイデンティティを一つに絞るのではなく、複数持つことは可能であり、多様性・多層性が存在することを学ぶ。
- ・自らも移民・クィアというマイノリティであり、複数のアイデンティティを持っている IPEK さんのライフストーリーを聞き、類似の背景を持つ高校生に、目指す方向性や目標の参考となることを狙う。
- ・ワークショップを通じて、参加同士のアイデンティティについて話すことで、ゲスト、留学生などが互いを知る機会をつくり、次回の留学生プログラムの交流につなげる。

●ゲスト講師：DJ IPEK

●協力：ドイツ大使館（招聘）、ゲーテ・インスティテュート

●実施内容：

ドイツ・ベルリン及びイスタンブールを拠点に活躍し、DJ、キュレーターから社会教育学者まで幅広い分野で活躍する DJ IPEK さんをゲストに迎え、高校生と留学生も交えたワークショップを行いました。まずはアイス

ブレイキングから始まり、「あなたは外国人ですか」「女性ですか・男性ですか」など、様々な質問を問いかけながら Yes/No のグループに分かれます。そして、自らもトルコ系移民としてドイツで育ち、多様なセクシャル・アイデンティティを持つ IPEK さんのライフストーリーを聞き、皆で人種・国・文化・性別・宗教など様々なアイデンティティや多様な価値観についてのディスカッションを行いました。高校生は約 15 名、大学生は約 5 名が参加しました。

- ・自己紹介アイスブレイキング 10 分
- ・ IPEK さんの多様なアイデンティティについてのお話 20 分
- ・ IPEK さん制作の映像（ミュージックビデオ）を鑑賞 10 分
- ・アイデンティティに関するアクティビティ（ディスカッション） 20 分
- ・振り返り 10 分

●工夫・注意点など：

アイスブレイキングを最初に取り入れることで、参加者が話しやすい雰囲気づくりをしました。Yes/No のアクティビティでは、どちらかはっきり選べない場合も、無理に選ぶことを強要せず、どちらかを選ばないという選択でも良いと伝えるようにしました。

●気づき・成果など：

「自分と他の参加者が、過去に同じ体験をしていたり、意外な共通点を持っていて驚いた」「同じバックグラウンドを持つ人同士でも、所属意識や価値観などの違いがある。それを理解することができた」などの声が上がりました。

アイデンティティは、決して一つの枠組みだけで決められるものではない、と語る IPEK さん。自身のマイノリティとしての経験をもとに、現在の活動に至るまでの様々な体験と思いをシェアしてくれました。

■アーティスト略歴

イペク・イペクチョウル (DJ IPEK)

1972年ミュンヘン生まれ。ベルリン及びイスタンブールを拠点に活躍するクィアDJ、音楽プロデューサー、キュレーター、フリーライター、イベントマネージャー及び活動家。社会教育学者。異なるセクシュアルアイデンティティーを持つ移民のための作業部会「Amuso」及び「トルコ出身のゲイ及びレズビアン」団体の設立メンバー。「ポスト移民」系アーティストネットワークKanakwood等のイベントマネージャーを務める。クィア・アイデンティティーやトランスカルチャー性をテーマに、ワークショップの開催や講演・執筆活動を続ける。DJ及びミュージシャンとして1990年代初頭より、DJ Ipekとしてベルリンのクラブシーンを盛り上げる傍ら、世界的にもQueen of Eklektik BerlinIstanの名で注目を集める。ニューヨーク、アムステルダム、マリ、イスタンブール、グラスゴー、北京等のエレクトロニック・ワールドミュージック系フェスティバルにてパフォーマンスし、ベルリンのCrossKulturフェスティバルの音楽監督も務める。映画音楽や各種ジングルの作曲を手がける。デビューコンピレーションアルバム「Beyond Istanbul」でGerman RecordCritics Awardに輝く。2005年のロンドンにおけるWorld Beat DJ Competition優勝。

多様な文化を学ぶ留学生プログラム

仕組みをつくる。サービス・ラーニングと留学生・高校生リーダー



●実施期間：2017年10月－2018年3月

(毎週2回 水・金 16:30－17:30)

●実施場所：東京都立一橋高校 定時制

●目的：

- ・留学生と交流する中で、お互いの言葉や文化について学び合う多文化コミュニケーションの場をつくる。
- ・言葉を使わないアクティビティを通じて、多様な背景・文化・言葉の異なる人たちの集まりでもコミュニケーションが取れるように多文化コミュニケーション能力を磨く。
- ・異なる背景を持つ高校生たちが気軽に部活動に参加し、色々な話ができる場をつくることで高校生たちにとって拠り所となる居場所をつくる。

●実施内容：

①言葉を使わないアクティビティ

ジェスチャーでの伝言ゲームや、イヤホンで音楽を聴き、外部の音を遮断した状態で、相手の口の動きだけを見ながら単語を伝える伝言ゲームを行いました。グループごとに映画のワンシーンを表現するシーンを再現するなど、相手に物事を伝えるために動きや表現を創意工夫する体験もしました。定期的に、高校生は約 15 名・大学生は約 10 名参加しました。

②塗り絵・多言語で会話

高校生の中には、上記のような活動的なアクティビティへの参加を困難に感じる生徒もいます。そのような生徒に対しては、塗り絵や折り紙といったような静かに手作業ができるようなアクティビティをつくり、一緒に作業をしながら多言語で会話をする留学生との交流活動をしました。塗り絵をしながら多言語でおしゃべりをし、学校生活や学校外で、どのような場や機会を必要としているかなど、生徒のニーズについて知る場にもなりました。

●工夫・注意点など：

高校生の参加者が少数だったり、生徒の人数が集まらない時でも、定期的に場を設けることによって、生徒たちにいつでも行けばそこに居場所があるということを認識してもらいます。アクティビティに参加しなくても、この場にはいることができると感じてもらえるような雰囲気づくりを心掛けました。

●気づき・成果など：

第3期は、プログラム策定と仕組み作りの期間でした。大学のサービスマーケティングという形で、留学生が部活動に参加することのできる定期的な仕組みをつくり、部活動を実施しました。

このような多文化多言語のコミュニケーションの中で、例えば、チーム対抗戦でのアクティビティを実施する際に、自分のチームが勝つことに集中

するより相手チームを励ましたり、英語のみではなく、日本語を話す生徒にも声をかけて、フォローしあうなど、互いに助け合い学び合うようになっていきました。また最初は積極的ではなかったけれども、留学生と話し始めると楽しそうに会話をする生徒や、日本人の生徒の中には多言語・多文化に触れるのが楽しく、部活動が拠り所になっている生徒もいました。

学校や普段の生活ではなかなか接点のない留学生やアーティストの大人達との交流を通じて、外部の人達を迎え入れるという体験をし、生徒達は部活動を自らの居場所として捉えるようになり、オーナーシップの芽生えが見られました。

第 4 部 :

終わりにかえて

終わりにかえて

「One Worldってどんな場？」－高校生・大学生からの声－

- 「我が家みたい」

- 「友達と居場所・・・自分を素直に出せる」

- 「色々な言葉が聞けるのが面白い、楽しい」

- “It was fun!”

- “I enjoyed attending this time because we played games and got to know each other a lot.”

- “When a student has a bicultural background, he generally starts to develop a sense of belonging in a multicultural place, and that is the reason why One World activity is and can be a promoter of Ibasho for migrant youth.”

- “I would like to think that both the university students and high school students found the classroom for One World to be part of our Ibasho... Because we had come from so many different backgrounds, we did not feel the need or peer pressure to ‘assimilate’ into one specific culture – in a way, the One World classroom gave all of us an opportunity to proudly represent our own cultures and homelands, while allowing us to learn from each other as cultural chameleons and mediators.”

3年間の実践を経た今、多言語交流部 (One World) は、『移民』の生徒たちと日本人の生徒たちが多言語・多文化を学びながら、自らの持つ多様性を肯定し、強みとして活かす成長の場となっています。

主にフィリピンや中国ルーツの生徒に加えて日本人の生徒も参加し、共に文化祭の企画・展示、多言語交流などの様々なアクティビティを行いながら、留学生との交流やアーティストによるワークショップそして校外学習への参加など、普段の日常生活では出会うことのない多様な人たちと接する機会にもなっています。

2018年3月、東京都立一橋高校で卒業式が行われました。多言語交流部 (One World) に参加した高校生達のほとんどが進路が決定し、卒業することができました。高校中退の複合的な要因が存在する中で、部活動という一つのコミュニティ・居場所が、高校生達が中退の壁を乗り越える要素だったのかもしれません。しかしながら、高校卒業の壁を乗り越えても、進学・進路の壁、そして在留資格の壁など引き続き社会の壁が存在する現状があります。

多様性を尊重し、異なる文化をつなぐ経験を持ち合わせた人材の重要性がますます高まっていく中、『移民』の若者の未来を考えることは、東京の未来を考えることにつながっていくのではないのでしょうか。

< END >

著者：一般社団法人 kuriya

執筆：

徳永 智子（群馬県立女子大学 講師）

角田 仁（東京都立一橋高校 定時制 教員）

海老原 周子（一般社団法人 kuriya 代表理事）

発行日：平成 30（2018）年 10 月 10 日

発行

アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）

〒102-0073 東京都千代田区九段北 4 丁目 1-28

九段ファーストプレイス 8 階

TEL 03-6256-8435 FAX 03-6256-8829

<https://www.artscouncil-tokyo.jp>

©2018 アーツカウンシル東京

Between's Passport Initiative

『移民』の若者たちを異なる文化をつなぐ社会的資源として捉え、アートプロジェクトを通じた若者たちのエンパワメントを目的とするプロジェクト。一般社団法人 kuriya と、東京都、そしてアーツカウンシル東京の三者が協働し、「東京アートポイント計画」の一環として平成 28 年より開始。

人材育成事業として、『移民』の若者たちがワークショップやプロジェクトの運営をともに行います。各プログラムの実施を通じて『移民』をはじめとする多様な若者（「ユース Youth）」と呼ぶ）たちが社会参加する機会をつくり、多様な人々が集まる場づくりをします。

*本事業では、多様な国籍・文化を内包し生活する外国人を『移民』と呼んでいます。

<https://medium.com/between's-passport-initiative>

主催：東京都、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）、一般社団法人 kuriya

Between's Passport Initiative に関する問い合わせ

一般社団法人 kuriya:contact@kuriya.co

無断転載禁止 / 執筆文の著作権は各執筆者に帰属する。

